

磯貝富士男著

『武家政権成立史』

——気候変動と歴史学——

吉川弘文館 一〇一三・一〇刊
A5 一六四頁 三二〇〇円

本書は、「武家政権成立という政治上の大変化が生じた必然性・事情について、気候変動要因や社会状況を含めての理論的見通しを提示すること」を課題として、十二世紀初頭から、平家政権が成立した治承三年（一一七九）政変までの時期を対象に、気候変動が政治史の展開に及ぼした影響について具体化することを目指した意欲的な著作である。

著者の研究は、一九七〇年代後半に発表された奴隸制に関する論文から始まる『日本中世奴隸制論』校倉書房、二〇〇七年に収録。その後は、中世社会で奴隸制が拡大した背景として十三〜十四世紀にかけて冷涼化が進んだことを主張し、また当該期を農業生産力の順調な発展期と説明してきた通説を批判して、通説の根拠の一つである水田二毛作の展開は生産力の向上を示すものではないと論ずるなど『中世の農業と気候』吉川弘文館、二〇〇二年、気候変動と歴史学とをつなぐ方法の開拓に努められてきた。

こうした氏の既往の研究成果を前提に、本書ではさらに時期を遡らせて、主に十二世紀を対象に気候条件が政治上の事件に及ぼした影響を跡づけることが試みられる。「二章」では、十二世紀

以後、日本・朝鮮・中国で共通して「武による新秩序」が形成された要因は、一一〇〇年直前頃に温暖化の頂点を過ぎて冷涼化が進んだ点にあったと主張する。また、氏が冷涼化の指標として依拠した「フェアブリッジ海水面変動曲線」の変動について、屋久杉の年輪成長幅から精度を高めることが図られており、このデータをもとにしながら十二世紀の政治状況を捉え直す試みが「二章」以下で展開されることになる。

「二章」では、保元の乱の分析にうつり、乱の原因として、冷涼化にともない十二世紀前半に頻発した飢饉により中央への徴収物が激減する中、中央支配層は荘園の確保に奔走し、その認可をめぐって朝廷内での対立が深刻化したこと、また荘園問題が地方での武力衝突を引き起こし、武力による解決が一般化したこと、社会状況があったことが指摘される。つづく「三章」では、平治の乱に至る過程に検討が加えられ、冷涼化・飢饉状況の中、信西が主導した政策への反発に乱の淵源があったことが主張される。

さらに「四章」では、平治の乱後へと検討が進む。一一六〇年代は二条親政・後白河親政のもと中央政界は相対的安定期を迎えたが、一一七〇年代に入り再び気候条件が悪化すると、社会的矛盾・対立が激化することになり、軍事・警察機能を担うことで異例の出世を遂げていた平家がそうした矛盾・対立に直面することになったとする。結果、悪化する社会状況に有効な打開策を見出せない後白河院政に対して、清盛は反発を強めてクーデターに走ったとされ、平家政権の成立が気候変動を規定要因として論じられている。

近年、精緻化が進む十二世紀の政治過程研究とは一線を画した独自の解釈がならぶ本書には、興味深い点とともにやや違和感を禁じ得ない部分もある。今後、本書での提起を受けて、気候変動が政治過程に及ぼした規定性を具体化する研究が深められることを期待して、つたない紹介を閉じたいと思う。

(前田英之)